

## 1982年度活動報告

事務局

1982年度の本会の活動は以下のように行いました。

### 1. 春の例会

- 1982年5月2日（於 新潟大学）
- 特別講演 小松直幹（帝国石油）「新潟における最近の石油探鉱」

### 2. 夏の例会

- 8月30・31日（於 島根大学大山合宿所）
- シンポジウム「西日本における新生代後期テクトニクス」

川辺孝幸（大阪市大）「近畿地方の鮮新・更新統の堆積盆地

（要旨）近畿地方の堆積盆地の形成機構については、基盤が横圧力でたわみ、その下に凸になった部分に堆積物がたまることによるとする説と、マントルから垂直につき上げる力によって基盤が隆起し、さらに地塊化して陥没することによるとする説のあることが知られている。演者の調査した近畿地方中部の古琵琶湖層群では、各時代の地層の等層厚線図を描くと、北北東—南南西と東北東—西南西方向の断裂によって境された基盤ブロックの輪郭が明瞭にでてくる。しかも、基盤に対して古琵琶湖層群は高不整合で接し、しかも1.5～4 mにも及ぶ大礫・巨礫を含む不淘汰礫岩が縁辺に発達する。このことから、演者は垂直つき上げにともなう地塊化にともなって堆積盆地が形成されると考える。

矢野孝雄（広島大）「本州中央部の新生代末期の造構運動」

（要旨）本号に掲載

桑原 徹（名城大）「第二瀬戸内沈降区の構造運動の特性」

（要旨）近畿地方東部・東海地方に分布する鮮新・更新統の第二瀬戸内層群は、堆積の中心を次第に西に移動しながら堆積する。濃尾地方では、第二瀬戸内層群は、西方に傾動する地塊上に堆積したものである。

このような運動は、横圧力によって基盤が波曲し、それにともなって断裂化し、ついで、その地塊の運動によるものとして説明できる。

藤田和夫（大阪市大）「西南日本の中期更新世の地殻変動をどうみるか」

（要旨）西南日本の地殻変動は、中期更新世以来加速され、大阪層群・高位段丘の変形速度は、中位段丘形成以前と以後では異なる。中央構造線は、中期更新世以後右横ずれ断層運動をおこなう。地震は、現在の地殻変動の反映である。

### 3. 冬の例会

○12月19・20日（於 地質調査所）

○一般講演

国安 稔（新潟大学）「秋田油田・由利油帯の褶曲・断裂系について」

天野一男（茨城大） 粟田泰夫（地調）「東北日本のネオテクトニクスに関する一考察」

中村康夫（中央開発），高橋治之・天野一男（茨城大）「双葉構造線の周辺の古応力場」  
（本号に掲載。）

渋谷 保（秋田大）・安房団研G「地層の堆積からみた褶曲の形成過程について——房総南  
端地域を例として——」

佐久間敏公・川島睦史（芝浦工大）・小玉喜三郎（地調）「東京湾周辺の強度記録にみられ  
る震動特性」

伊藤谷生（東京大）「断層変位量評価における微地形解析の重要性——神奈川県山北町平山  
断層を例として——」

小山 彰（大阪市大）「糸静線近傍の瀬戸川層群中にみられる石英脈について」

宇井啓高（富山大）「愛知・静岡県境付近の中央構造線の破碎岩類」

鈴木茂之（広島大）「舞鶴帯の定義」

下川浩一（地調）「ESR年代測定法の原理とテフロクロノロジーへの適用」

○シンポジウム「エシュロン構造」

佃 栄吉（地調）「エシュロン断層としての岩国活断層系」

杉山雄一（地調）「入山断層系（静岡県）のエシュロン構造」

加藤碩一（地調）「トルコの地震と北アナトリア断層について」（一部本号に掲載）

矢入憲二（岐阜大）「アフリカ大地溝帯にみられるエシュロン断層系」

松田時彦（地震研）「地震断層にみるエシュロン形態」

小出 仁（地調）「エシュロン断層の発達過程と生成環境」

鈴木尉元（地調）「徳田（1927）のエシュロン構造について」

木村 学（香川大）「千島弧のエシュロン構造形成過程」

伊藤谷生（東京大）「褶曲系の重ね合わせと雁行配列

玉木賢策・湯浅真人（地調）「日本周辺海域にみられるエシュロン構造」

なお以上の内容は次号（No.30）に掲載予定です。

## 1983年度 春の例会

○1983年4月2日（於 鹿児島大）

○特別講演

木崎甲子郎（琉球大）「琉球列島地質構造の諸問題」

（要旨） 論者は、琉球列島において、協同研究者とともに島弧のモデルを作るべく研究をつけている。そのためには、中・古生代の層序がたてられなければならないが、新しい時代の変動は、琉球石灰岩が鍵となる。本日は、琉球列島において近年明らかにされた結果についてのべる。

琉球列島は、古くはSüß や小藤文次郎によって3列に、波多江信広によって4列に、小西健二によって6列に区分された。しかし、各構造列は島弧にそって続くわけではない。慶良間ギャップを境に、それ以西に四方十帯がつかないのは、その一例である。構造列の特徴から、北琉球・中琉球・南琉球にも区分される。

西九州には、綾状の重複構造がみられる。これは大きな剪断帯で、高千穂変動に際して変形が集中して形成されたものである。これは、西南日本弧と琉球弧との会合にともなうものと考えられる。この種の構造を考える際に、氷河などの変形構造の研究は、たいへん参考になる。論者もかつて氷で褶曲や断層を実験的につくったことがあるが、ひじょうに興味深いものである（WAGEMANの本参照）。

近年、琉球トラフの基盤は、白亜紀～古第三紀の花崗岩類らしいことが明らかにされた。地殻の厚さは10～20 kmで中間的である。

グリンタフは、石垣島のは古第三紀であるが、北部のものは明らかに中新世である。

琉球列島ができるのは、鮮新世の島尻層群の時代からである。琉球石灰岩を切る10万年以降に活動した断層が多く発達するが、これは、隆起・陥没にともなうものである。宮古島には北西—南東方向の断層が発達するが、これは、鮮新世以降の構造運動によるものである。ヴェルム氷期には、黄河は沖縄にまで及んでいた。

琉球列島の大きな変動は、ジュラ紀、白亜紀、漸新世などが認められるが、もっとも新しい変動は、更新世中期の琉球石灰岩の陥没運動である。琉球トラフの形成も、更新世以降の変動によるものである。

なお、境界条件がなかなか設定できないが、いずれ林大五郎と共同でシミュレーション実験を試みたいと思っている（文責：鈴木尉元）。